

## 歩いて感じて楽しむ 茅ヶ崎市美術館でインクルーシブな企画展

駅前から延びる細い路地を歩いて街の喧騒を離れると、海からの風が木陰を抜けて、夏の日差しの中にも涼しさが感じられる。木々の緑に覆われた丘の、つづら折りの小道を登ってゆくと、ガラス張りのエントランスと、飛び立つ鳥の翼のような屋根を持った美術館がある。神奈川県茅ヶ崎市の茅ヶ崎市美術館で、7月14日から9月1日、企画展「美術館まで（から）つづく道」が開催された。（本誌）

### 関係性に揺さぶりを

企画展のテーマは「インクルーシブデザインの手法を活用したフィールドワークを表現へ」というもの。きっかけは、美術館周辺の昔ながらの細く入り組んだ道を「むしろ迷路のように楽しんだ」という、ある弱視者のひと言だった。そこから、「道が複雑で分かりにくいという要素を、異なる認識、価値観から捉えることができないだろうか？」という問いかけが生まれた。そして、そのヒントを探るために、マイノリティと位置づけられることの多い障害者らと取り組む「インクルーシブデザインの手法を用いたフィールドワーク」が、昨年から断続的に行なわれた。

そのフィールドワークで、視覚障害者・聴覚障害者・車椅子ユーザー・幼児らとともに茅ヶ崎を歩いた4組のアーティストが、そのときの経験をもとに、多様な感覚を用いて鑑賞する新たな作品を制作・展示したのが、この展覧会である。

障害者やマイノリティをめぐる「助ける側」「助けられる側」という二者の関係性に揺さぶりをかけるとともに、障害の有無を超え、誰もが一人ひとり異なる感覚を持ちながら生きる「感覚特性者」であるという観点から、違いを認め合い、ともに歩むことを楽しみ、その価値を捉え直す機会となることを目指すというのが、コンセプトだ。

## 触覚の旅に出よう

アートユニット<sup>マストラックス</sup>MATHRAXの『うつしおみ』は、触覚・聴覚・嗅覚・視覚で鑑賞できる作品だ。アーティストの久世祥三さん（エンジニア）と坂本茉莉子さん（デザイナー）、それに香りの専門家である稲場香織さん（資生堂グローバルイノベーションセンター香料開発グループ研究員）が、視覚障害のある小倉慶子さんと盲導犬リルハとともに、雨の中でフィールドワークを実施。茅ヶ崎の「まるでミステリー小説の中に入り込んだような道」を楽しんだ。

そのときの「リズム感」や「空気感」がインスピレーションになった「ひとつづきの道」である作品は、口の字型に並べられた木製の細い台の上に、木製のオブジェが貼り付けられているもの（この台は、車いすユーザーにも触りやすい高さ）。100個以上あるオブジェは、小さな丸から楕円形、たまご型、立方体、三角形、細長い棒とさまざまに形を変え、途中には伸びをしたような細長いキツネもいる。

この「触感の道」は、触る楽しみだけでも魅力満点なのだが、さらに、オブジェにはセンサーが埋め込まれており、鑑賞者が触るとそれぞれ異なる音を出す。「つながり」を表現した音はグ